

平成18年度

児童生徒の生活・学習意識実態調査の結果から

(小学校・学校用)

平成19年3月

長野県教育委員会

多様化した児童生徒及び保護者の生活・学習意識を調査研究し、学校と家庭が連携して伸びる力を一層伸ばすための指導に資する目的で本調査を実施しました。本調査は、平成2年度より数年おきに実施し、今回は5回目となります。今回は、前回(平成14年度)の調査との比較をするとともに、【通塾の理由、携帯電話の所持、よく見る親の姿】などの調査項目を増やしました。

以下に、その概要をお知らせしますので、今後の指導に生かしてください。

中・高・自律学校の結果は、県教育委員会のホームページをご覧ください。

対象 小(2,4,6年)、中(1,2,3年)、高(1,2,3年)の児童生徒

各学年約1,200人(6%抽出)、総数11,247人

調査対象の児童生徒の保護者(小49校、中42校、高31校)、総数10,522人

実施期日 平成18年7月10日～26日

内容 5分野26項目(設問数:小49,中54,高55,保21)

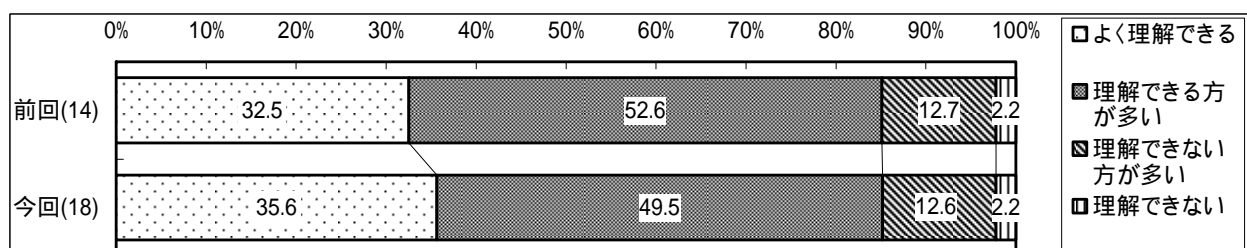
方法 アンケート方式

【まとめと提言】

- 1 学習内容がよく理解できる児童の割合の増加、家庭学習時間の増加などの上向きの傾向をとらえ、個に応じた指導を充実させるなど、地道な努力を重ねたい。
- 2 嫌いな教科に対する児童の苦手意識、通塾させる保護者の不安や基礎となる学力をつけてほしいという学校教育への期待を受け止め、「わかる授業」を目指して、教科の特性を生かす教材研究、興味関心をもてる導入の工夫や、できるようになった喜びを実感できる終末の工夫などの授業改善を行いたい。
- 3 携帯電話所持や朝食の欠食については、個の実態把握に立ち、家庭と連携して指導を進めたい。

調査結果の概要 (主なものを抽出)

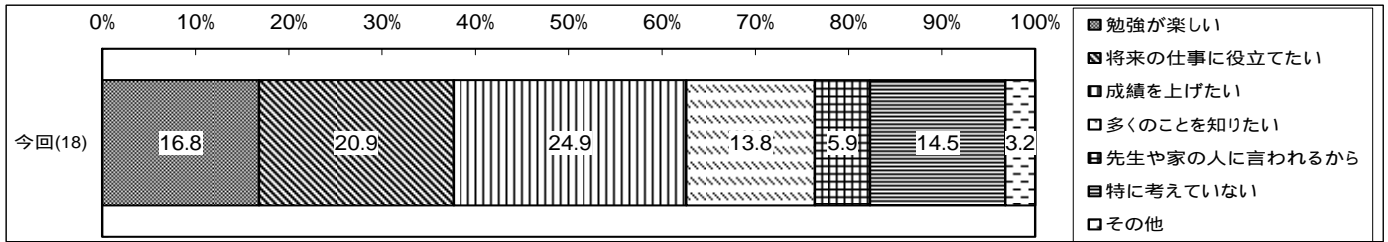
1 「学習内容の理解度」(指定のないものは小学生全体 以下同)



「よく理解できる」の割合が増加しているが、「理解できる方が多い」と合わせた割合は、前回と同じ85.1%である。

複数教師による指導や習熟度別の学習等、個に応じた指導を充実させ「理解できない」「理解できない方が多い」とする児童への対応を工夫したい。

2 「学習の目的意識」

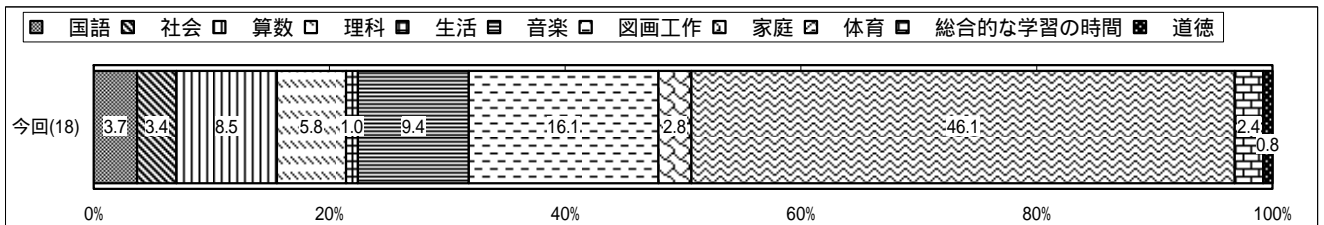


1位「成績を上げたい」24.9%、2位「将来の仕事に役立てたい」20.9%、3位「勉強が楽しい」16.8%である。

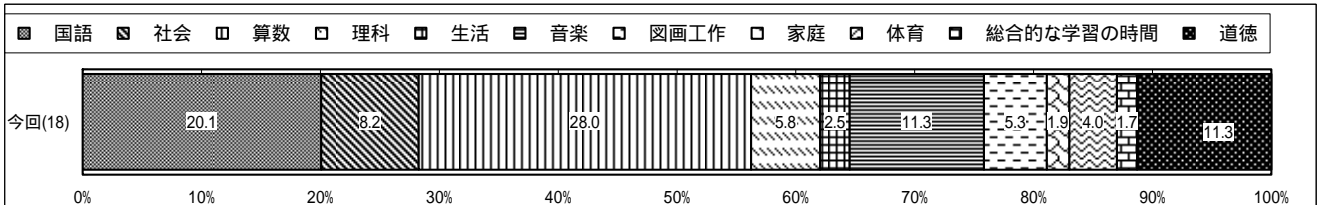
学習意欲を大切にし、学ぶことの喜びを感じることができるよう配慮していきたい。

3 「教科の好き嫌い」

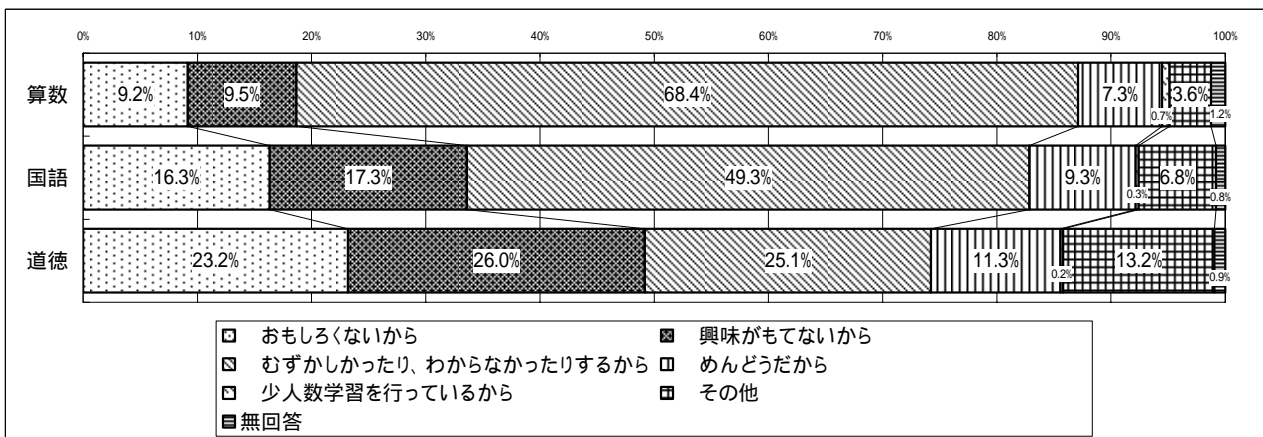
(1) 好きな教科



(2) 嫌いな教科



(3) 嫌いな教科とその理由

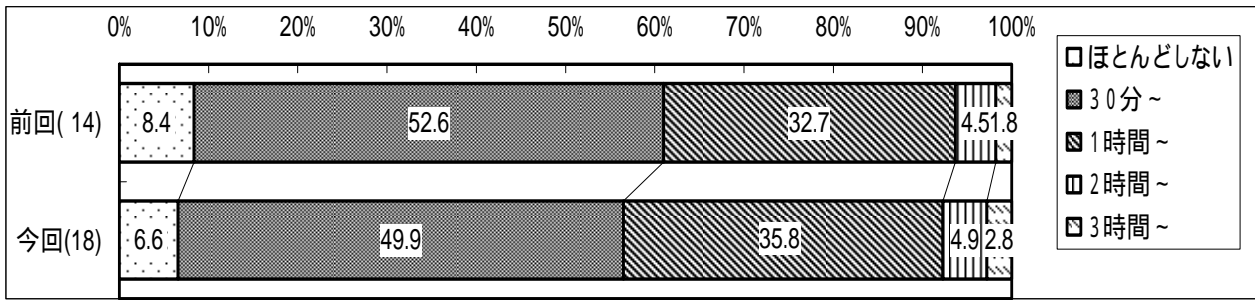


好きな教科は、「体育」46.1%、「図画工作」16.1%、「音楽」9.4%の順である。

嫌いな教科は、「算数」28.0%、「国語」20.0%、「音楽」、「道徳」11.3%の順である。算数・国語の嫌いな理由は、「むずかしかったり、わからなかったりするから」の割合が高いが、道徳は「おもしろくないから」「興味がないから」の割合も高い。

教科等の特性に応じた楽しさに触れることができるように教材研究に努めたい。

4 「家庭学習時間」(平日)

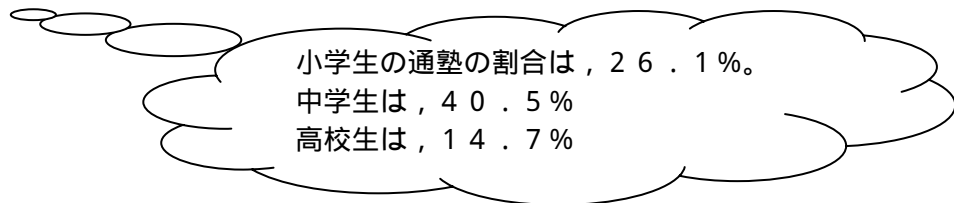


平日に家庭学習を「ほとんどしない」「30分以上1時間未満」が減少しており、1時間以上学習する割合が増加している。

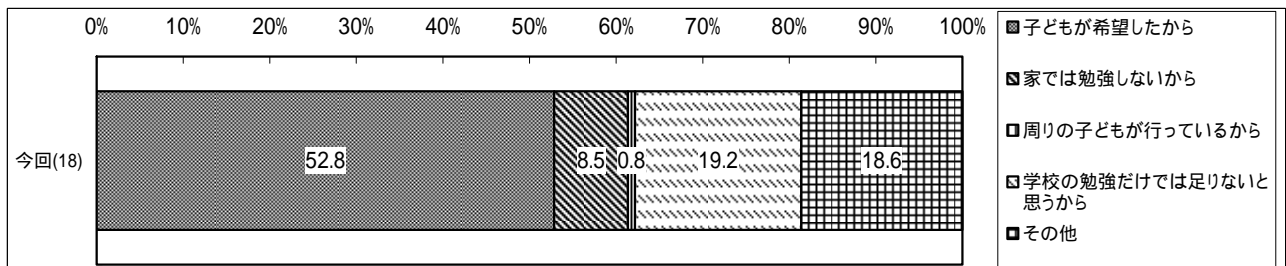
家庭学習を習慣化させる指導と、学習の質を高めるための具体的な指導をしたい。

5 「通塾の割合」と「通塾させる理由(保護者)」

(1) 通塾の割合



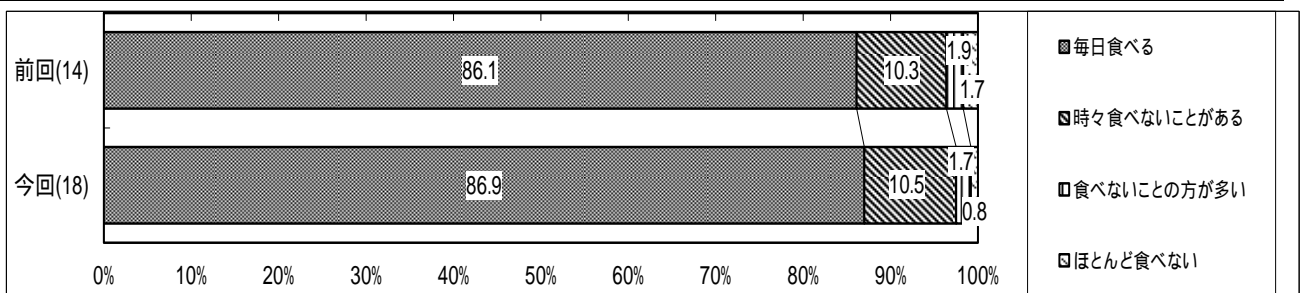
(2) 通塾させる理由(保護者)



通塾させる理由として、「子どもが希望したから」が52.8%と最も多く、次いで「学校の勉強だけでは足りないと思うから」が19.2%、「家では勉強しないから」が8.5%となっている。

現状に不安を感じて通塾させる保護者の思いを受け止め、個の実態に応じた指導を行いたい。

6 「登校日の朝食」

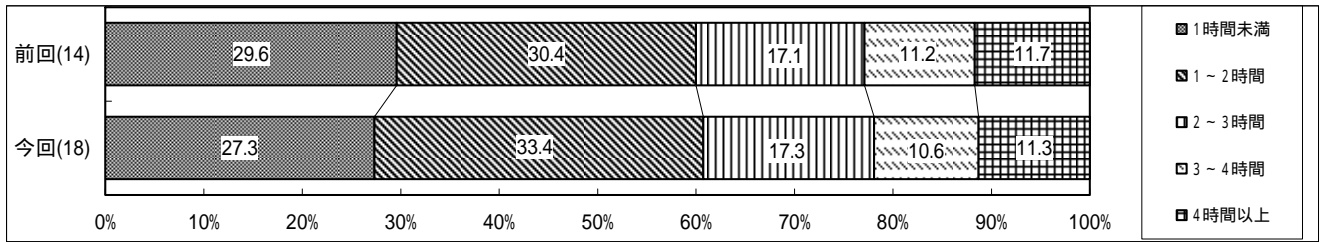


朝食を「毎日食べる」児童は86.9%であり、前回より0.8%増加した。「ほとんど食べない」が0.8%、「食べないことの方が多い」が1.7%いるが、いずれも前回よりわずかではあるが減少している。

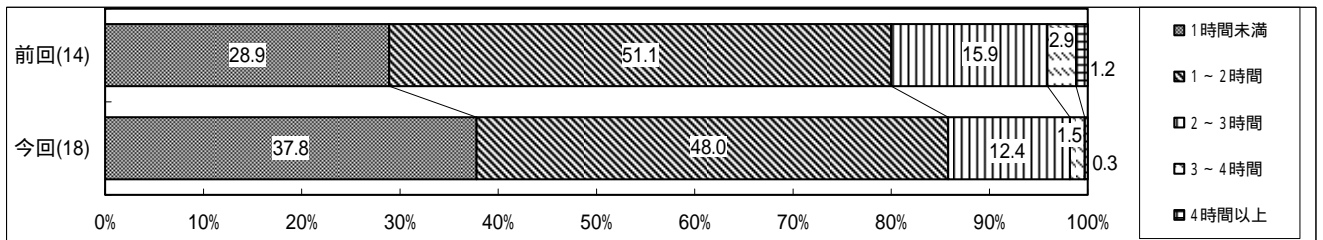
朝食は、生活リズム全体を整えるために重要であることを引き続き家庭へ発信していきたい。

7 「普通日にテレビ等を見たりテレビゲームをしたりする時間」

(1) 視聴時間（小学生）



(2) 視聴が「適当」と思う時間（保護者）

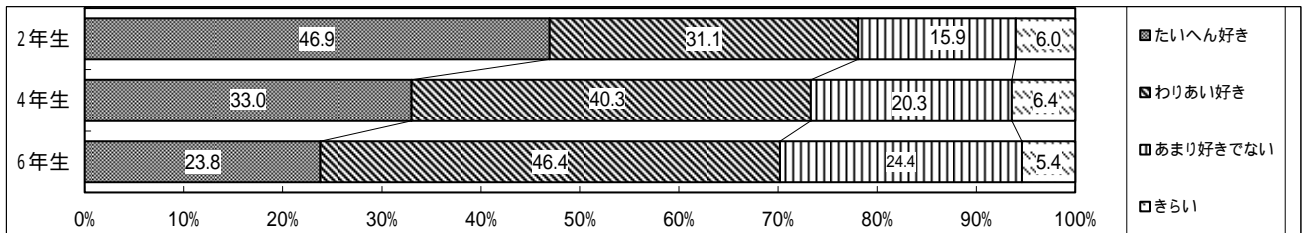


「1時間未満」の児童が2.3ポイント減少し、「1～2時間」「2～3時間」が増加した。
保護者が「適当と思う時間」は、「1時間未満」が8.9ポイント増加しており、保護者の願いと実際の視聴時間には差があることがわかる。

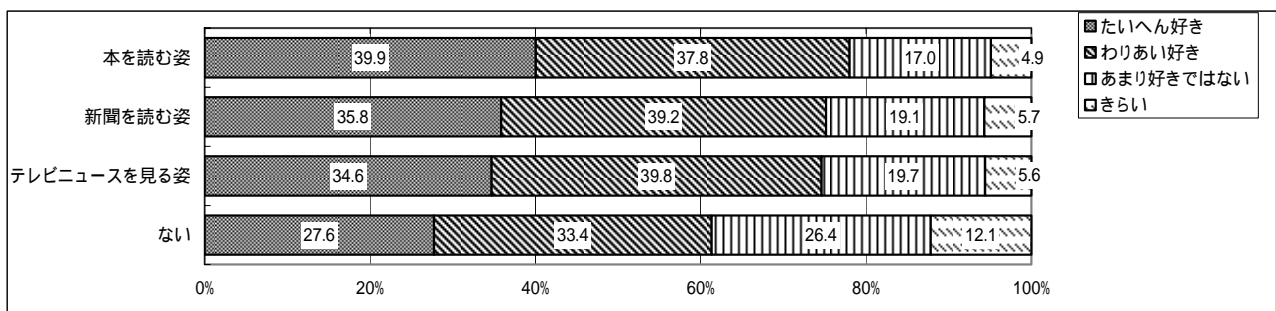
視聴時間が「4時間以上」とする児童など、家庭と協力して個の実態に応じた指導をしたい。

8 「読書の好き嫌い」と「よく見る大人の姿」

(1) 読書の好き嫌い



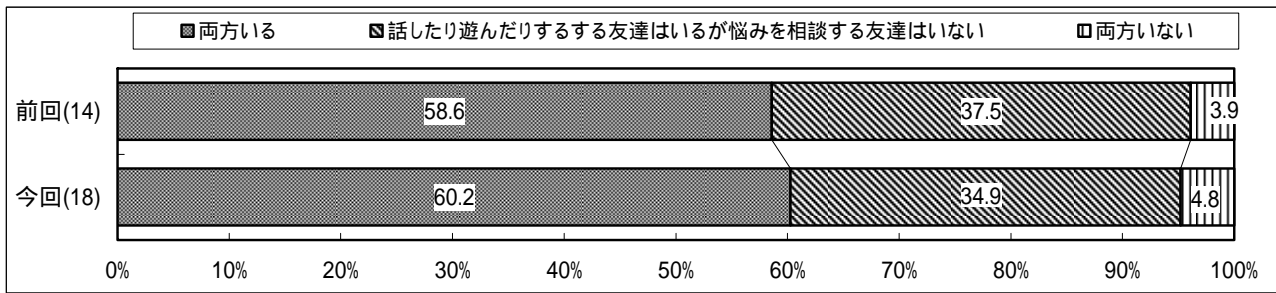
(2) よく見る大人の姿と読書の好き嫌い



読書が「たいへん好き」「わりあい好き」とする児童が2, 4, 6年生ともに7割を超えている。
家族（大人）が「本を読む姿」をよく見ている児童の39.9%が「読書がたいへん好き」であるのに対し、家族が「本」「新聞」「テレビニュース」を読んだり見たりする姿を見ることは「ない」児童では、27.6%である。

教師も児童と一緒に読書するなどして、児童が読書を好むようになる環境づくりを進めたい。

9 「話したり遊んだりする友だちや、悩みなどを相談する友だちの有無」

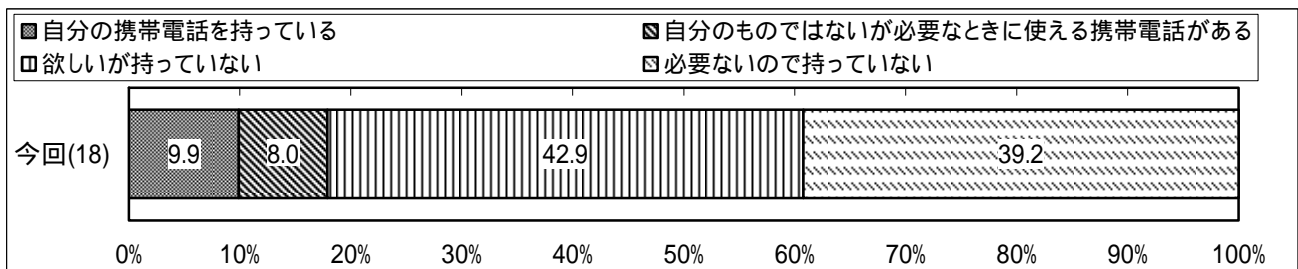


話したり遊んだりする友だち、悩みを相談する友だちが「両方いる」とする児童はやや増加している。反面、「両方いない」とする児童もやや増加している。

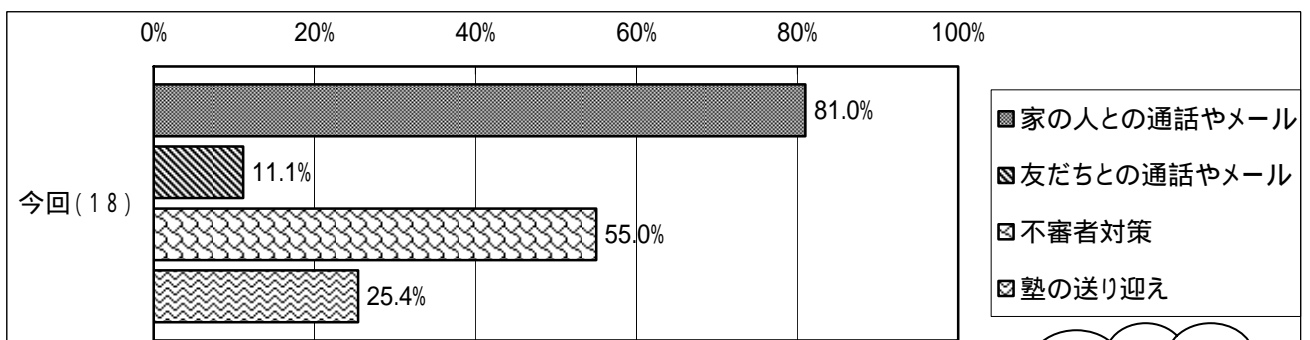
友だちがいない、とする児童の存在を見極め、声をかけたり学級活動を工夫したりするなどのきめ細かな配慮をしたい。

10 「携帯電話の所持」と「携帯電話でしたいこと」

(1) 携帯電話の所持(児童)



(2) 携帯電話を所持させている理由(保護者)



(3) 携帯電話でしたいこと(児童)

	家の人との通話やメール(%)	友だちとの通話やメール(%)
2年生	29.0	20.5
4年生	47.2	34.3
6年生	55.0	63.9

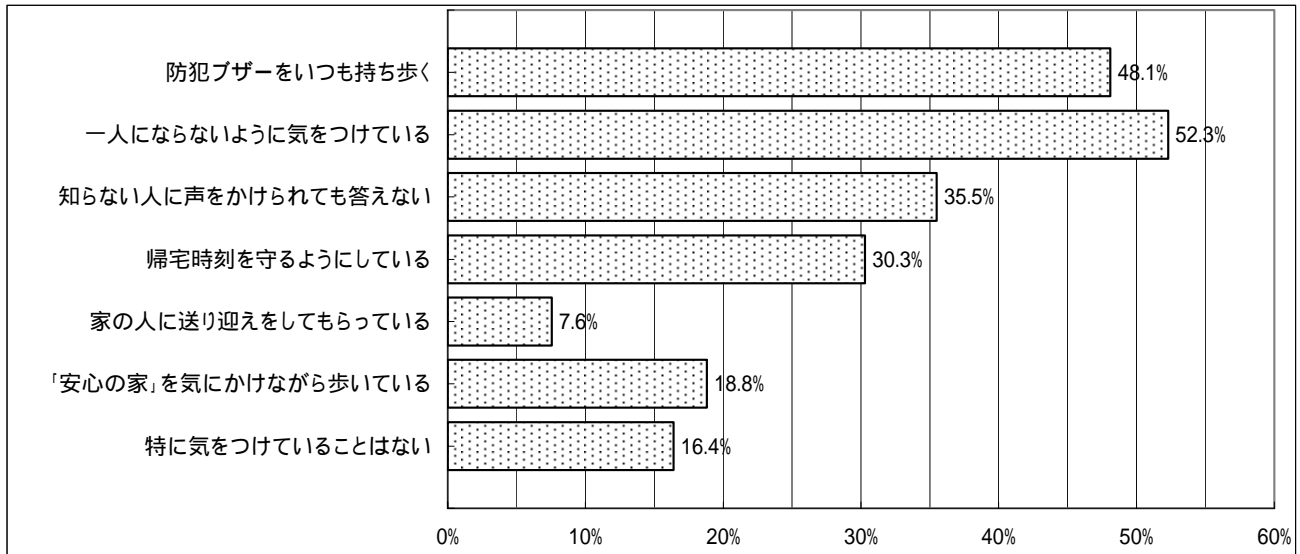
6年生になると友だちと通話やメールをしたい児童が増える。

携帯電話を実際に所持している児童は 9.9%であるが、携帯電話を「欲しい」と思っている児童が 42.9%おり、「必要ない」と思っている児童 39.2%を上回っている。

我が子に携帯電話を所持させる理由として、多い順に「家の人との通話やメール」81.0%、「不審者対策」55.0%、「塾の送り迎え」25.4%となっている。

児童は、6年生になると「家の人」より「友だち」との通話やメールをしたいとする児童が増える。保護者と児童の意識のずれを認識し、家庭で子どもと話し合うことの大切さを家庭に発信したい。

11 「登下校時や帰宅後に気をつけていること」

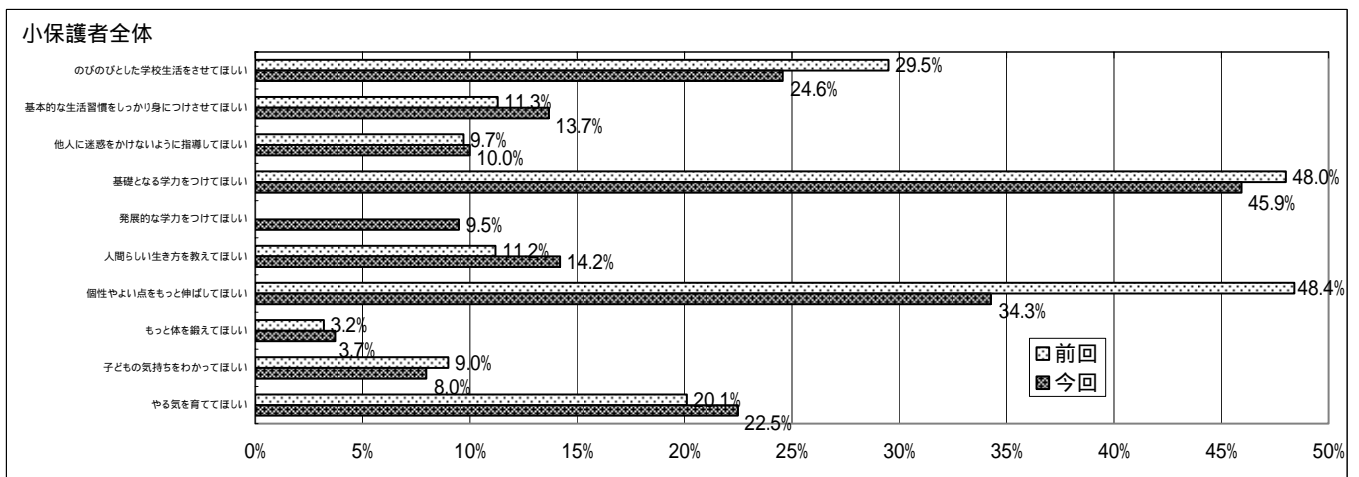


「一人にならないように気をつけている」とする児童が5割を超え、次いで「防犯ブザーをいつも持ち歩く」が47.8%、「知らない人に声をかけられても答えない」35.3%、「帰宅時刻を守るようにしている」30.2%の順である。

「安心の家を気にかけてながら歩いている」とする児童が18.7%いる。

不審者対策の指導が浸透している反面、児童の緊張も高まっていると思われることから、地域や個の実態に応じた具体的な指導によって児童に安心感をもたせたい。

12 「学校教育に期待すること」(保護者)



「基礎となる学力をつけてほしい」45.9%、「個性やよい点をもっと伸ばしてほしい」34.3%、「のびのびとした学校生活をさせてほしい」24.6%の順である。

前回1位であった「個性やよい点をもっと伸ばしてほしい」が14.1ポイント減少し、2位となった。代わって「基礎となる学力をつけてほしい」が1位となり、2位と大きく差をつけた。

保護者の意識の変化を受け止め、小学校段階での基礎基本を身につける指導に更なる力を入れたい。

平成18年度

児童生徒の生活・学習意識実態調査の結果から

(中学校・学校用)

平成19年3月

長野県教育委員会

多様化した児童生徒及び保護者の生活・学習意識を調査研究し、学校と家庭が連携して伸びる力を一層伸ばすための指導に資する目的で本調査を実施しました。本調査は、平成2年度より数年おきに実施し、今回は5回目となります。今回は、前回(平成14年度)の調査との比較をするとともに、【通塾の理由、携帯電話の所持】の調査項目を増やしました。

以下に、その概要をお知らせしますので、今後の指導に生かしてください。

小・高・自律学校の結果は、県教育委員会のホームページをご覧ください。

対象 小(2,4,6年)、中(1,2,3年)、高(1,2,3年)の児童生徒

各学年約1,200人(6%抽出)、総数11,247人

調査対象の児童生徒の保護者(小49校、中42校、高31校)、総数10,522人

実施期日 平成18年7月10日～26日

内容 5分野26項目(設問数:小49,中54,高55,保21)

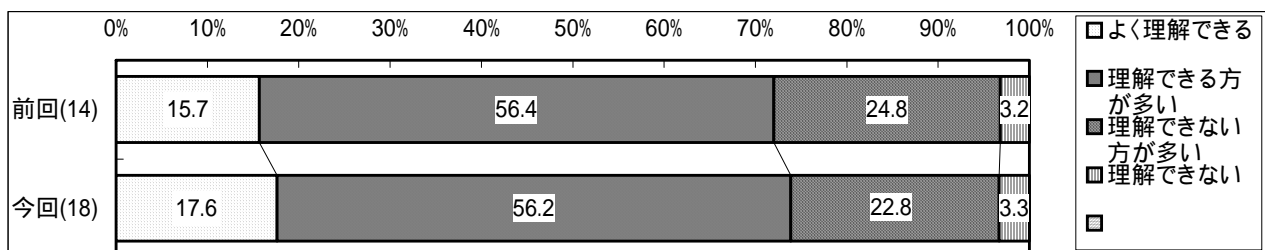
方法 アンケート方式

【まとめと提言】

- 1 学習内容がよく理解できる児童の割合の増加、「成績を上げたい」「将来の仕事に役立てたい」などの学習の目的意識の高まりをとらえ、伸びる力を一層伸ばす指導の充実を図るとともに、家庭学習の質を高めるための指導の工夫もしたい。
- 2 携帯電話を持っている生徒が中学3年生では30%以上になり、その使用状況では「サイトの利用」「ゲーム」などで保護者の考えとの相違がみられる。携帯電話所持の必要性や利用について家庭への啓発をするとともに、「携帯電話利用」のモラル、危険性を含めた学習を進めたい。

調査結果の概要 (主なものを抽出)

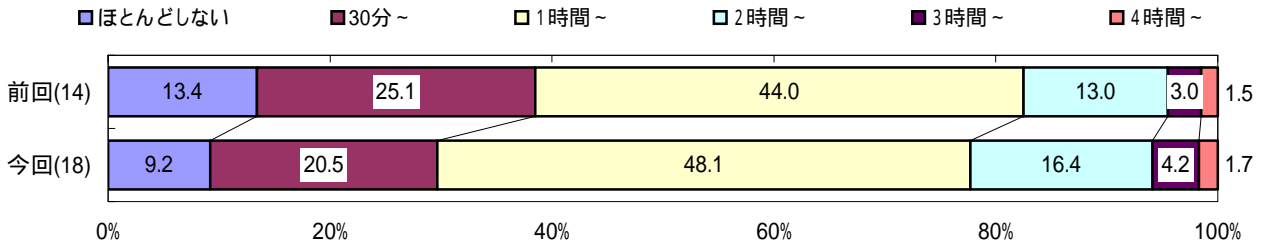
1 「学習内容の理解度」(指定のないものは中学生全体 以下同)



「ほとんどの授業がよく理解できる」生徒が増加し、「理解できない授業の方が多し」生徒が減少している。

少人数学習、補充的・発展的学習など個に応じた指導をさらに充実させたり、扱いに軽重をかけた年間指導計画を工夫したりすることなどで分かる授業をめざしていきたい。

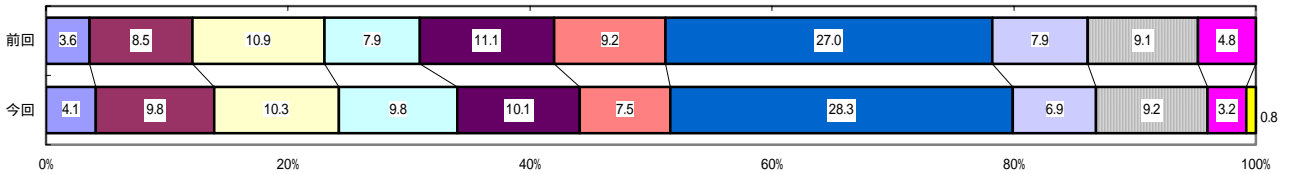
2 「家庭学習時間」(平日)



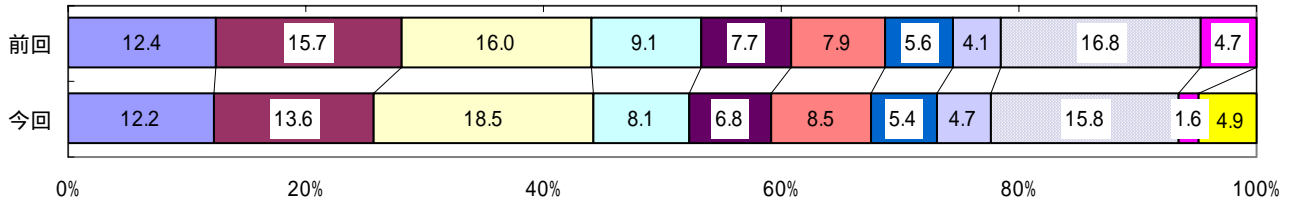
「ほとんどしない」「30分~1時間」が減少し、全体的に家庭での学習時間が増加している。個に応じて学習内容を充実させる指導の工夫をしたい。

3 「教科の好き嫌い」

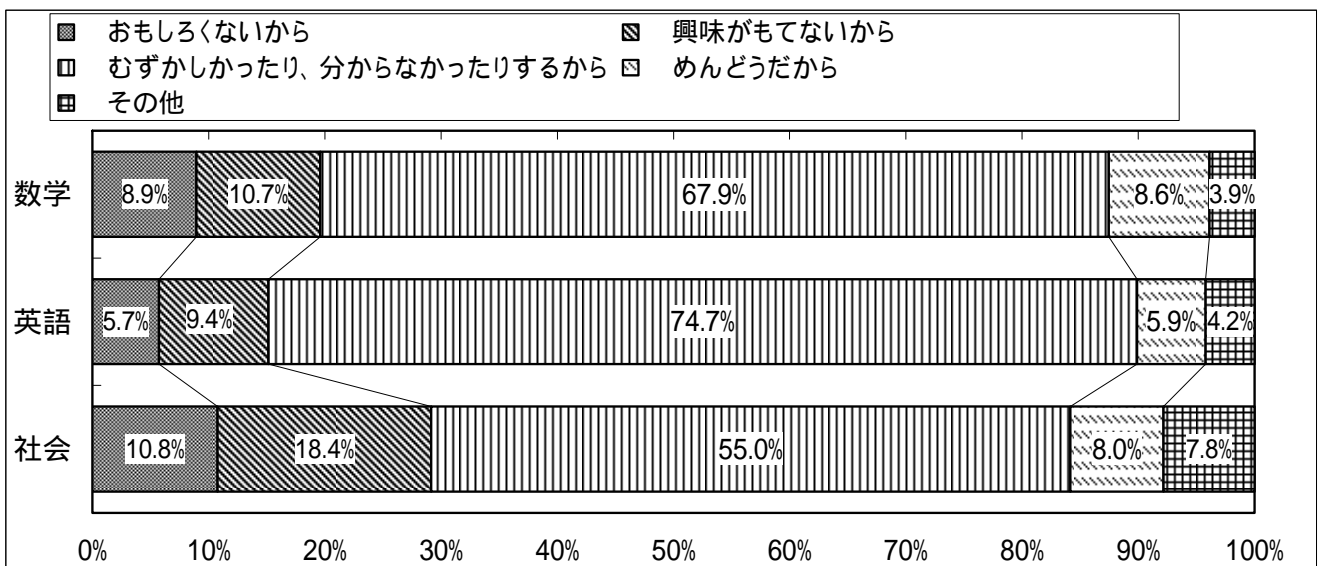
■国語 ■社会 ■数学 ■理科 ■音楽 ■美術 ■保健体育 ■技術・家庭 ■英語 ■総合的な学習の時間 ■道徳
 <好きな教科>



<嫌いな教科>

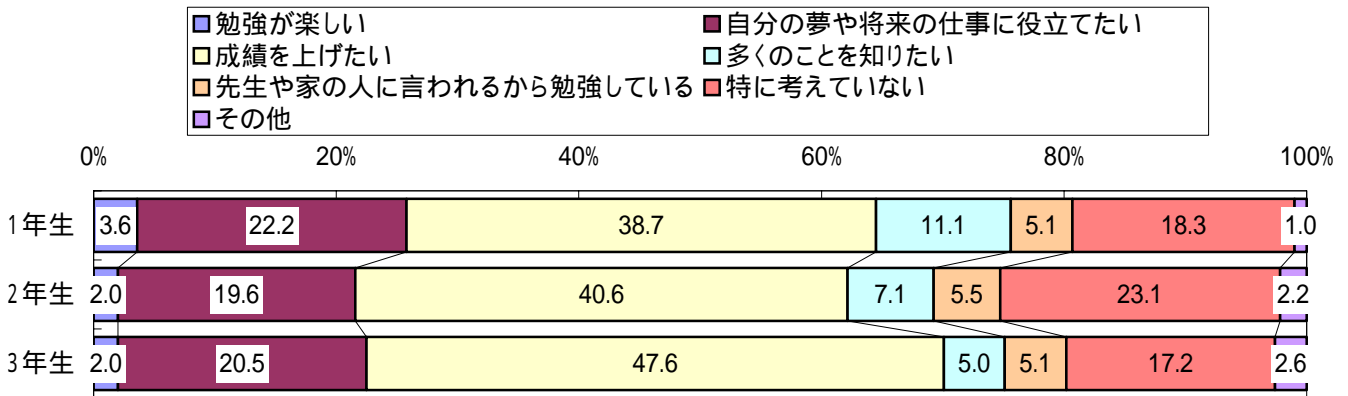


<嫌いな教科とその理由>



好きな教科は、「保健体育」「数学」「音楽」の順であり、嫌いな教科は「数学」「英語」「社会」の順である。嫌いな理由は、どれも「むずかしかったり分からなかったりするから」が5割を超える。教科の特性に応じて興味関心をもたせ、分かる授業に向けた指導のあり方を研究したい。

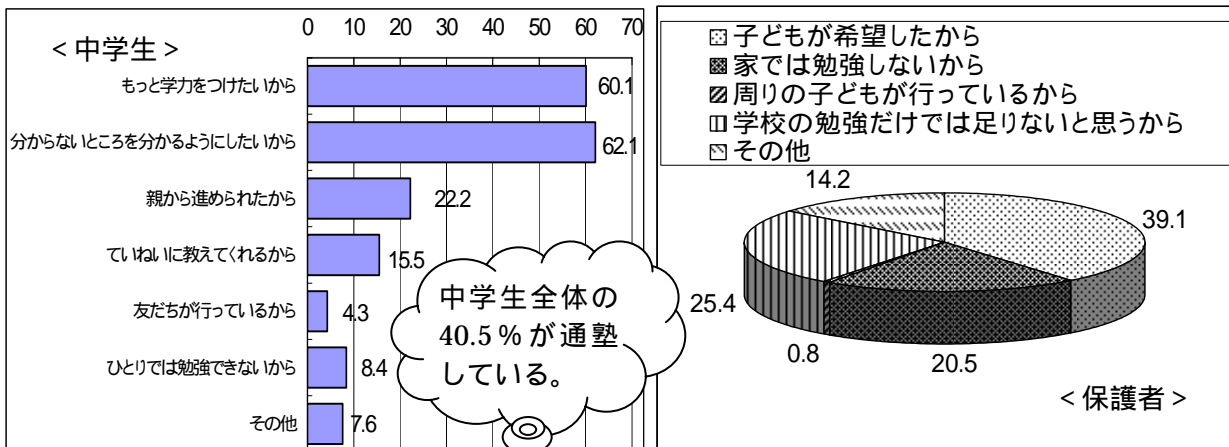
4 「学習の目的意識」



各学年とも「成績を上げたい」が最も多く、学年があがるにつれて増加している。次に多いのが「自分の夢や将来の仕事に役立てたい」で、3年生は20.5%である。「特に考えていない」とする生徒は2年生に多く、23.1%である。

将来への展望をもって学習できるように、学年の発達段階に応じて適切な進路指導を行いたい。

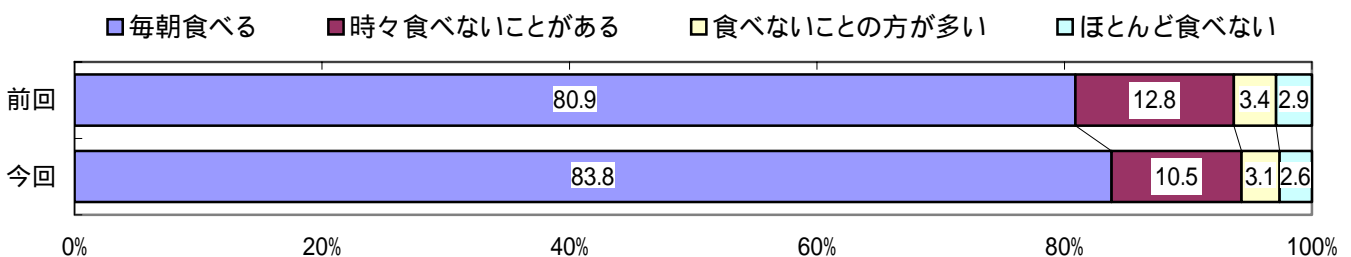
5 「通塾の割合とその理由（中学生・保護者）」



通塾の理由(中学生)として「分からないところを分かるようにしたい」62.1%、「もっと学力をつけたい」60.1%が多い。保護者は、「子どもが希望したから」39.1%が最も多いものの、「学校の勉強だけでは足りないと思うから」25.4%、「家では勉強しないから」20.5%も多い。

中学生の4割が通塾している現状を考慮した家庭学習や生活指導のあり方を考えたい。

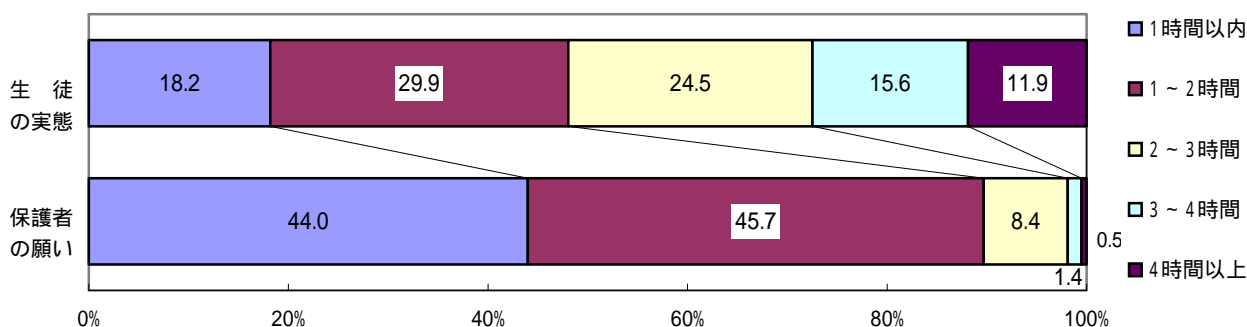
6 「登校日の朝食」



前回に比べ「毎朝食べる」割合が増したが、「毎朝」は食べない生徒が16.2%いる。

朝食をとることは、成長期の健康や、学習の集中度にかかわることを理解させたい。

7 「普通日にテレビ等を見たりテレビゲームをしたりする時間（中学生・保護者）」

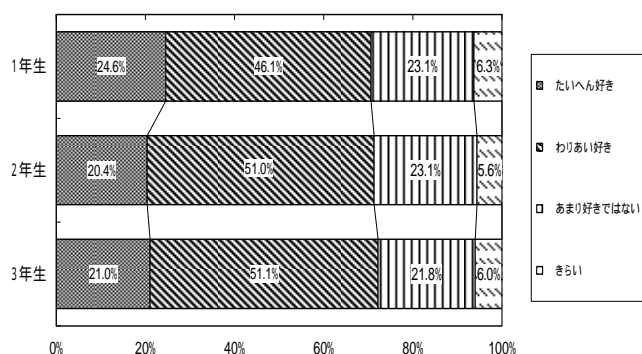


生徒の実態と保護者の願いの間にはズレが見られ、保護者の89.7%はテレビやゲームに費やす時間を2時間以下と望んでいるが、実際に2時間以下とする生徒の割合は48.1%である。「4時間以上」とする生徒が11.9%いる。

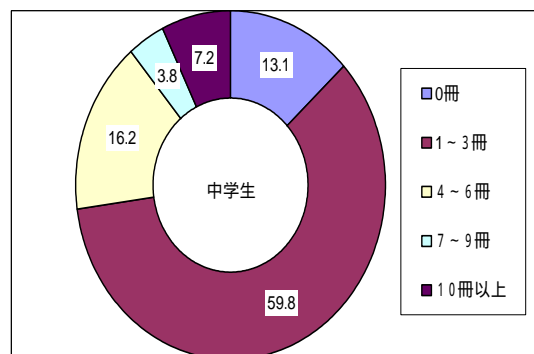
生活のリズムづくりについて生徒に考えさせるとともに、家庭への啓発も必要である。

8 「読書の好き嫌い」と「読書量」(1か月)

(1) 読書の好き嫌い(教科書, まんが, 雑誌は入れない)



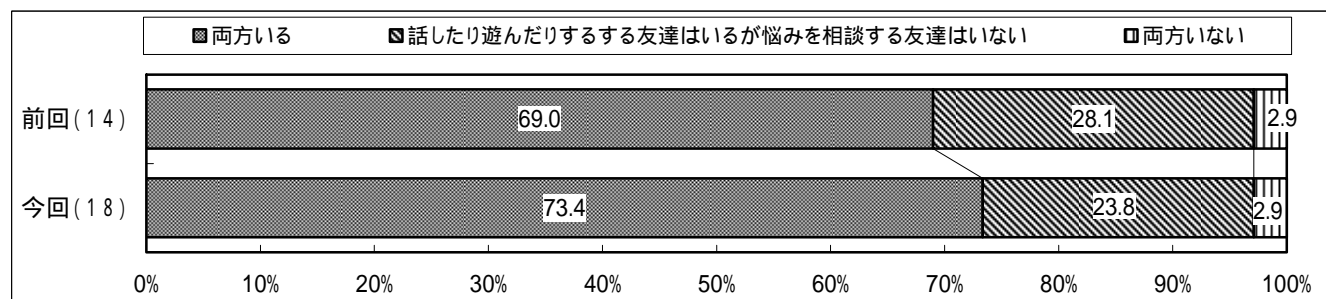
(2) 1か月の読書量



1か月の読書量は中学生全体の72.8%が3冊以内である。

生徒と読書したり, 感想を述べ合ったり本の紹介をしたりするなどの環境づくりをしたい。

9 「話したり遊んだりする友だちや, 悩みなどを相談する友だちの有無」

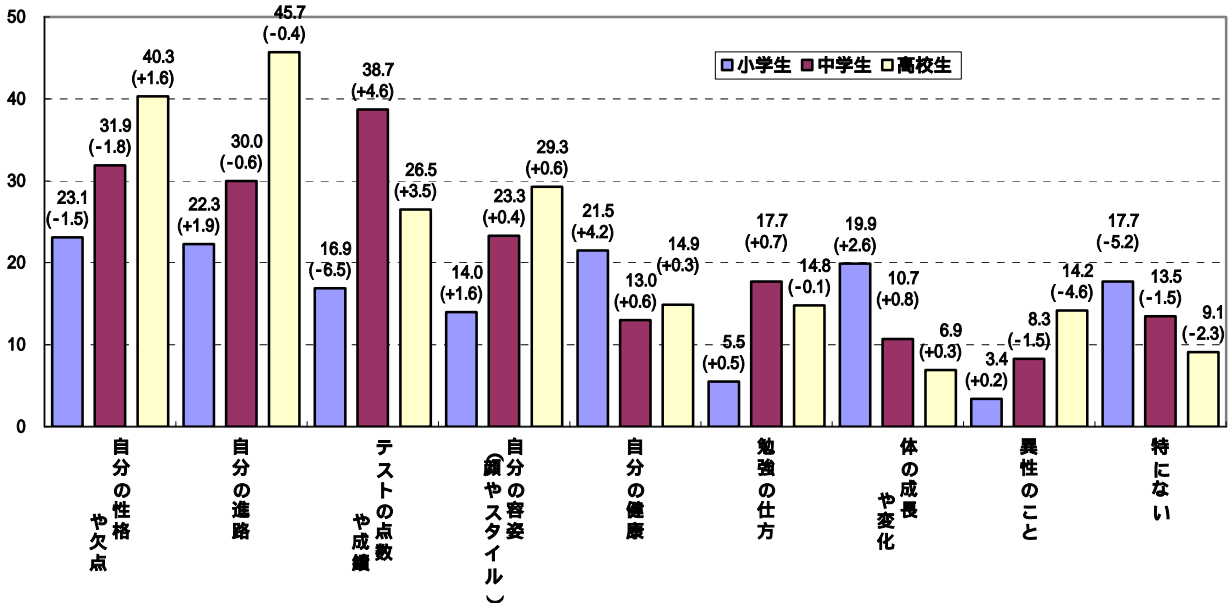


「『話したり遊んだりする友だち』と『悩みを相談する友だち』の両方いる」とする生徒が73.4%で、前回よりやや増加している。前回より減少してはいるが、「悩みを相談する友だちがいない」とする生徒が26.7%いる。

学校内, 学級内, 部活等での人間関係や, 個々の抱える悩みをつかみ, きめ細かな指導をしたい。また, 家庭と連携し合い, 子どもの様子の変化を見逃さないようにしたい。

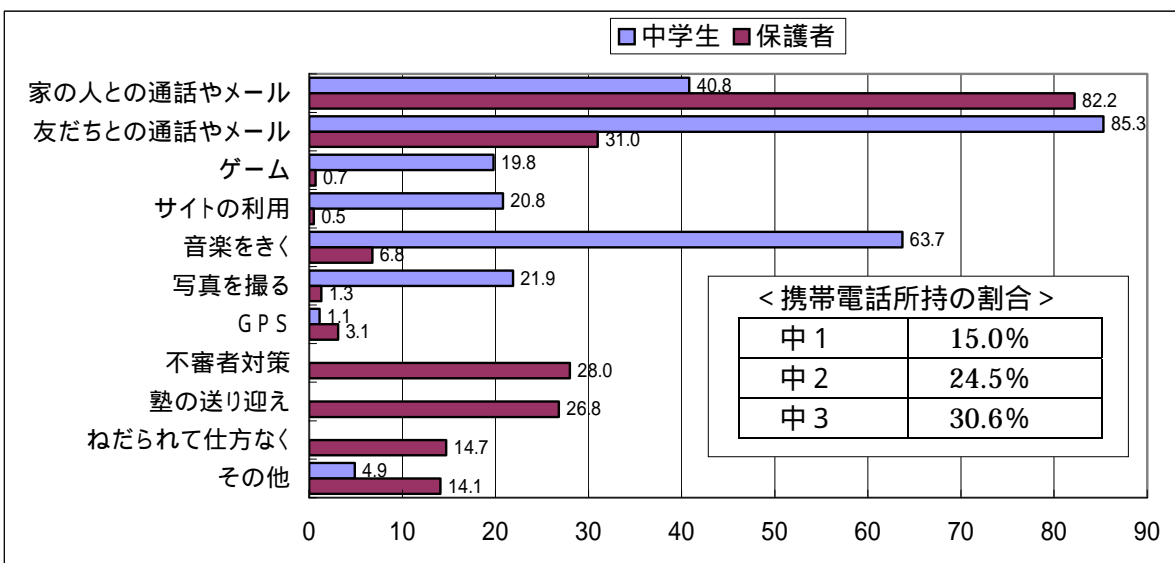
10 「生活上の不安感」

()内は、前回14年度調査との差



「テストの点数や成績」に不安を感じている生徒が38.7%で最も多く、前回より4.5ポイント上昇している。次いで「自分の性格や欠点」31.9%、「自分の進路」30.0%、「自分の容姿」23.3%と続く。小学生や高校生より不安感の割合が高い項目は「テストの点数や成績」「勉強の仕方」である。「進路」を含めた「学習面」に不安を抱えている生徒が多い。個に応じた指導を行い、学力をつけていきたい。不安や気がかりなことは個々によって異なるので、一人一人をよく見ていきたい。

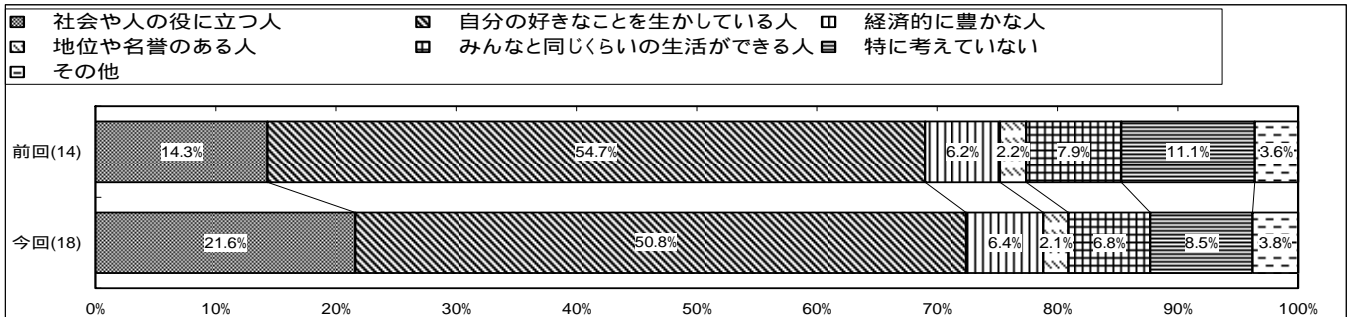
11 「携帯電話の所持の割合と理由（中学生・保護者）」



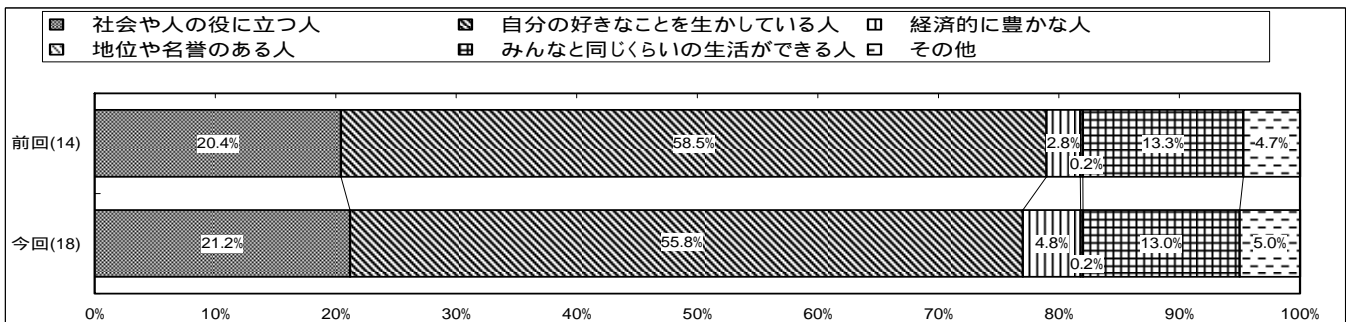
学年が上がるにつれて携帯電話所有の割合が高くなっている。中学生が携帯電話でしたいことは「友達との通話やメール」85.3%、「音楽をきく」63.7%の順であるが、保護者は「家の人との通話やメール」82.2%、「友達との通話やメール」31.0%の順である。「写真」「サイト利用」「ゲーム」をしたいとする中学生がそれぞれ2割前後であるのに対し、保護者は1%前後であり、中学生とのずれが大きい。携帯電話利用のモラル、危険性を含めた学習を進めたい。

12 「将来像（中学生・保護者）」

< 中学生全体 >



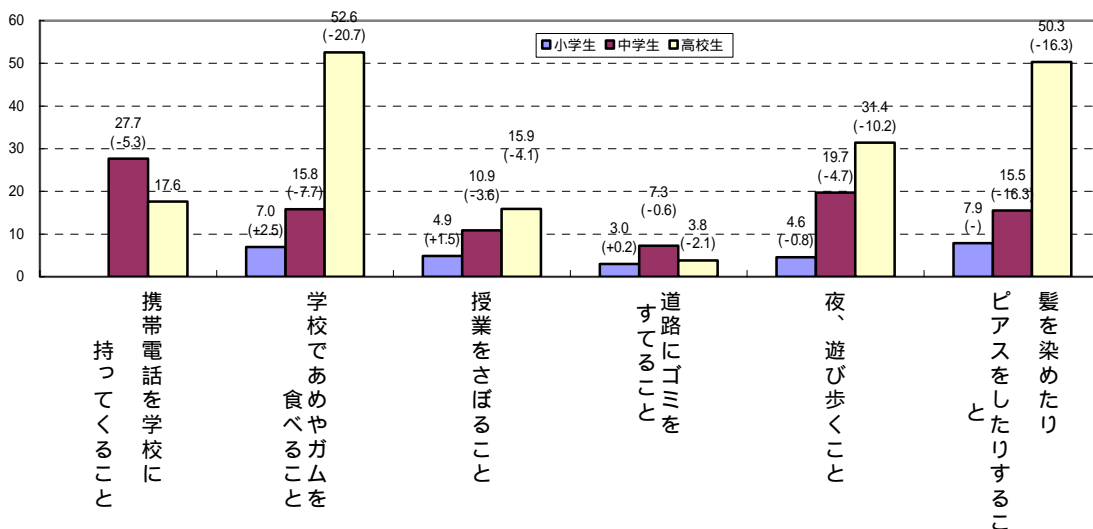
< 中学生保護者全体 >



中学生の「社会や人の役に立つ人」21.6%は、前回に比べて生徒で7.3ポイント増加している。保護者では、「経済的に豊かな人」も前回同様約13.0%であり、生徒より高い割合を示している。高校進学という目先の進路だけでなく、中学生の段階から、働くという視点から社会との関わり方等についてより深く考えさせたい。

13 「規範意識（してもいいと思うこと）」

()内は、前回14年度調査との差



中学生は、「携帯電話を学校に持つてくること」が27.7%で最も多く、「夜、遊び歩くこと」19.7%、「学校であめやガムを食べること」15.8%と続く。

道徳、特別活動を含め、全教育活動を通して規範意識を高める取り組みが一層求められる。

平成18年度 第5回

児童生徒の生活・学習意識実態調査の結果から

(高校・学校用)

平成19年3月

長野県教育委員会

多様化した児童生徒及び保護者の生活・学習意識を調査研究し、学校と家庭が連携して伸びる力を一層伸ばすための指導に資する目的で本調査を実施しました。本調査は、平成2年度より数年おきに実施し、今回は、5回目となります。

今回は、前々回(平成10年度) 前回(平成14年度)の調査との比較をするとともに、【通塾の理由、アルバイト体験、よく見る親の姿】などの調査項目を増やしました。

以下に、その概要をお知らせしますので、今後の指導に生かしてください。

小・中・自律学校の結果は、県教育委員会のホームページをご覧ください。

対象 小(2,4,6年), 中(1,2,3年), 高(1,2,3年)の児童生徒
各学年約1,200人(6%程度抽出), 総数11,247人
調査対象の児童生徒の保護者(小49校, 中42校, 高31校), 総数10,522人
実施期日 平成18年7月10日~26日
内容 5分野26項目(設問数: 小49, 中54, 高55, 保21)
方法 アンケート方式

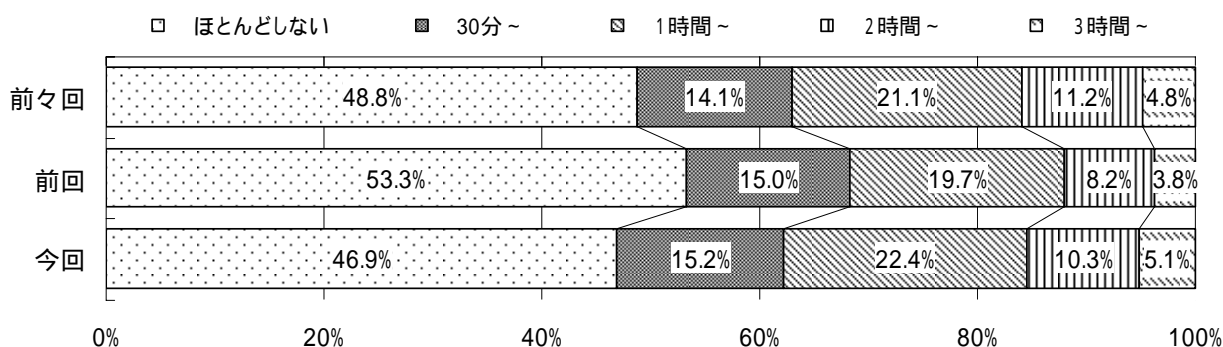
【まとめと提言】

- 1 生徒が自分で将来設計できるようなキャリア教育の工夫
- 2 学力向上のためのわかる授業作りの推進
- 3 携帯電話の使用方法・マナーの指導の徹底

調査結果の概要(主なものを抽出)

【 ()内は前回(H14)との差, [新]は、今回新たに加えた調査項目 】

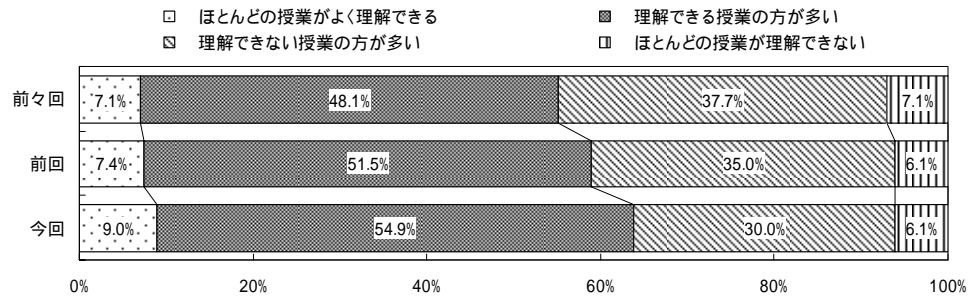
1 「家庭学習時間」



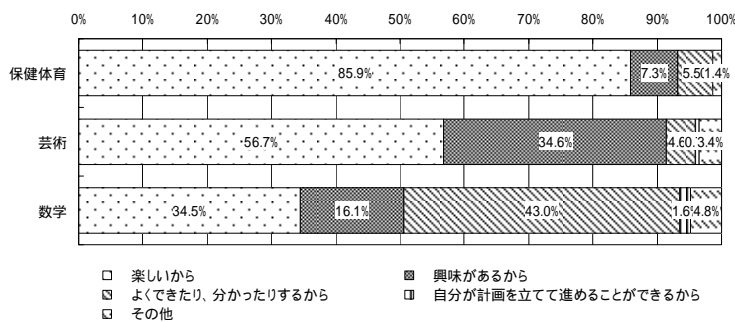
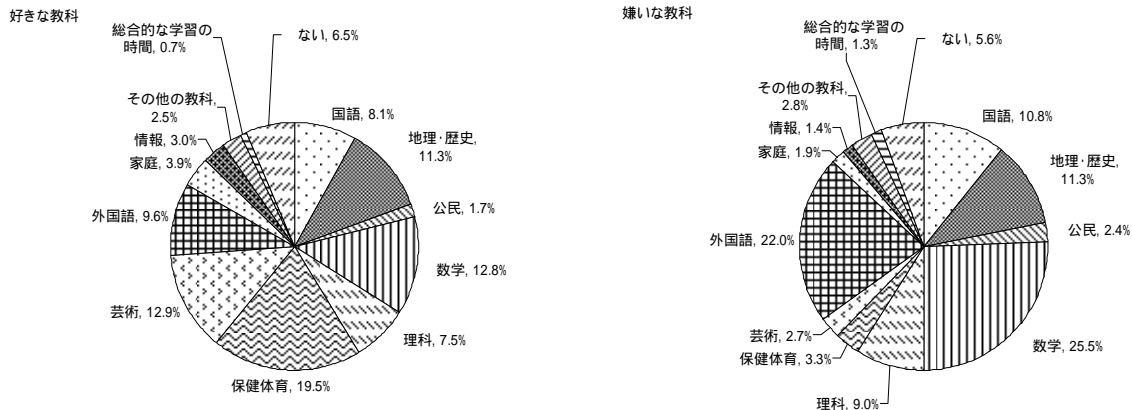
前回とは異なり、今回は学習時間がやや増加したものの、「ほとんどしない」が約半数を占める実態は変化していない。宿題を工夫するなど、家庭で学習に取り組みさせる手立てが必要であろう。

2 「学習内容の理解度」

回を重ねるごとに「よく理解できる」「理解できる方が多い」がいずれも増加してきている。さらに内容を精選し、授業の工夫をはかっていきたい。



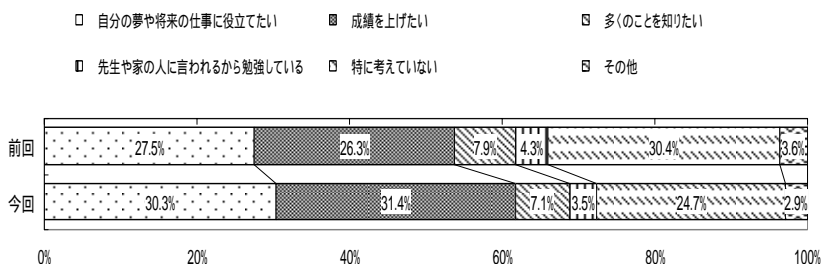
3 「教科の好き嫌い」



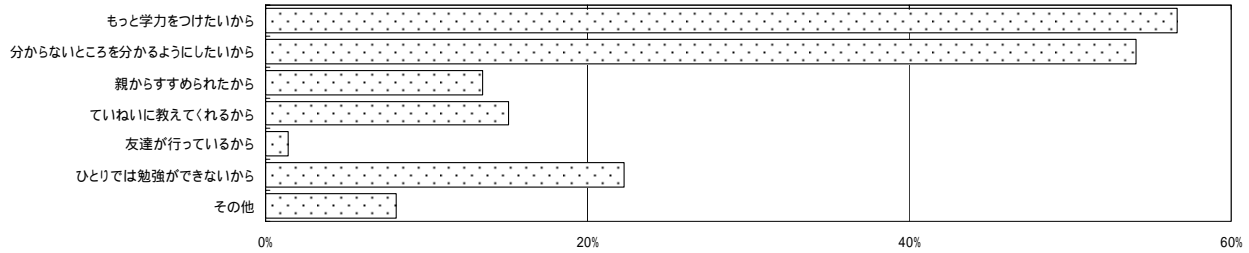
好きな教科は「保健体育」「芸術」「数学」の順、嫌いな教科は「数学」「外国語」「地理・歴史」の順である。好きな教科の上位3教科の内、実技中心の「保健体育」と「芸術」ではその理由の第1位が「楽しいから」であるのに対し、「数学」では「よくできたり、分かったりするから」である。分かる喜びを体験させる授業を創出していきたい。

4 「学習の目的意識」

前回に比べて「自分の夢や将来の仕事に役立てたい」「成績を上げたい」という前向きな目的が増加し、「特に考えていない」が減少した。キャリア教育の実践を通して将来の夢や進路について明確な目標を持たせることにより、積極的に学習にとりくませたい。

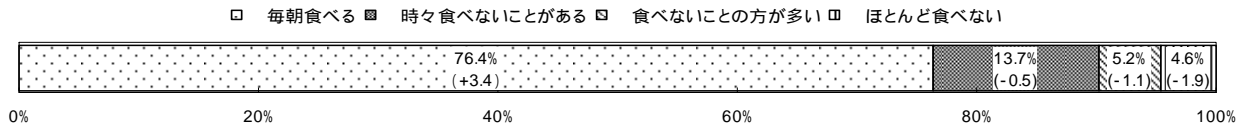


5 「通塾の割合とその理由」〔新〕

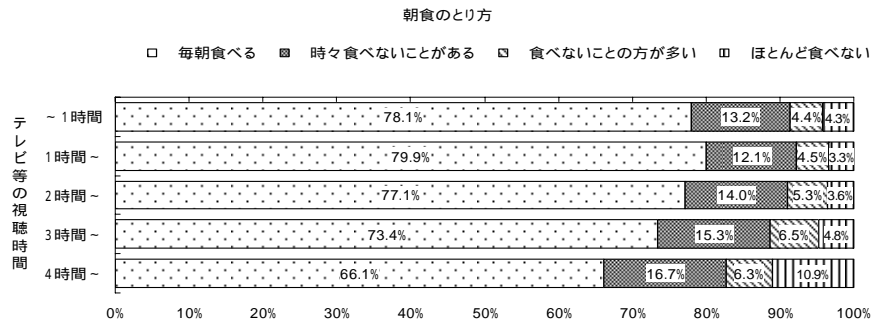


今調査での初の設問。塾へ行っている割合は14.7%で、中学生の通塾率が40.4%であることに比べると割合は少ない。塾へ行くのは「もっと学力をつけたいから」と「分からないところを分かるようにしたいから」が主な二つの理由である。

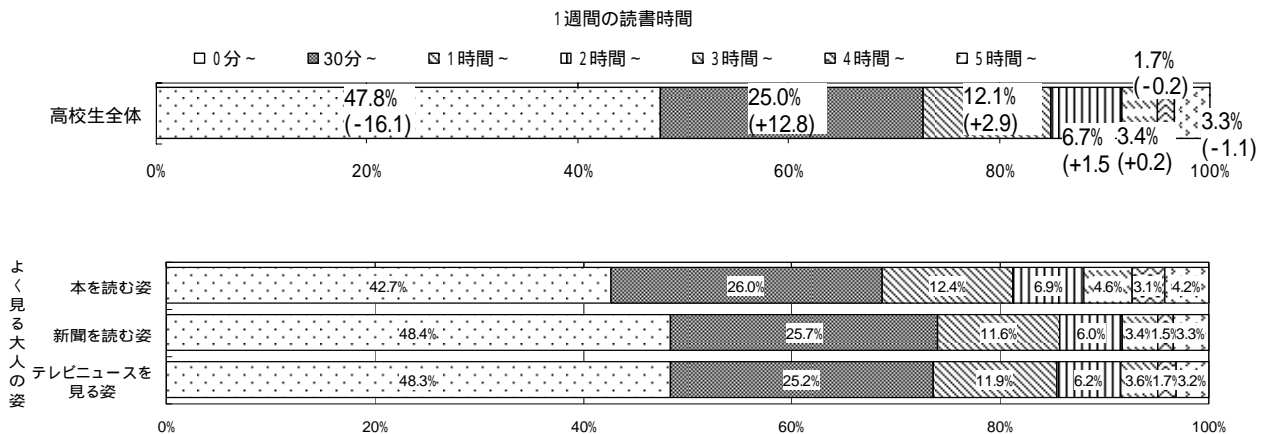
6 「登校日の朝食」



登校日にきちんと朝食を取る割合は増加している。テレビ等の視聴時間との関係を見ると、視聴時間が長くなるほど、朝食を抜く割合が高くなるのがわかる。朝食をきちんととらせることから、生活のリズムを作らせていきたい。



7 「読書」

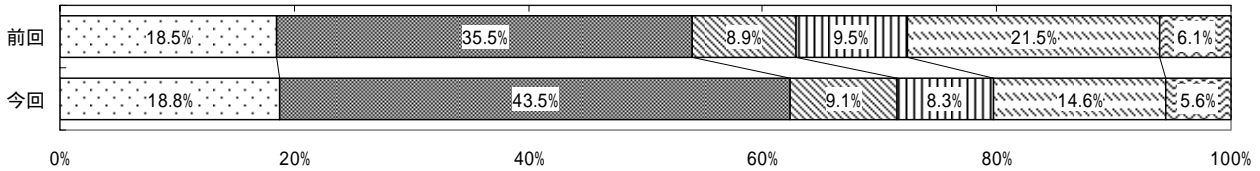


依然として高校生全体の半数近くがほとんど読書をしてないが、前回と比べその割合は、16.1ポイント減っている。読書する大人の姿を見る生徒ほど本を読む傾向にある。

高校でも読書の機会を作る一方、家庭でも家族皆で読書時間を設ける等、環境作りが重要である。

8 「進路に対する考え」

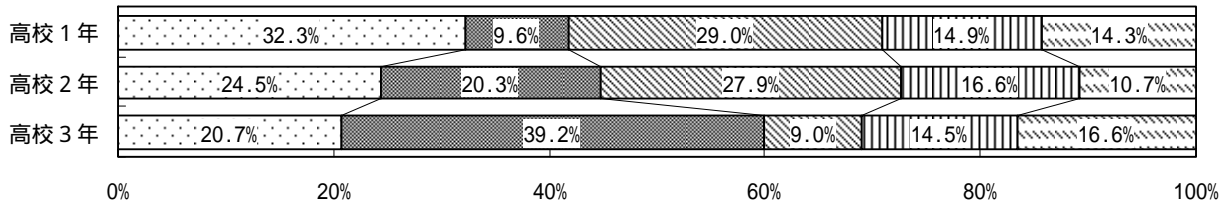
- 希望する学校には、浪人してでも入りたい
- 浪人はしたくないので、合格できる学校を選びたい
- 現役での進学が無理なら、就職してもよいと思っている
- 就職したい
- 迷ってはいはっきりしない
- あまり考えたことがない



前回に比べ、「浪人はしたくないので、合格できる学校を選びたい」が増加し、「迷ってはいはっきりしない」が減少した。浪人してまで希望する大学をねらうより、現役で入れるところへ入りたいという傾向がうかがえる。

9 「将来つきたい職業をきめているか」〔新〕

- 中学校のころから決めてあって現在の高校に入学してきた
- 高校に入学してからどんな職業につきたいか決まり、現在それに向けて努力している
- 現在はまだ決めていないが、残りの高校生活の中で決めていきたい
- どんな職業がいいか迷っている
- 決まっていない

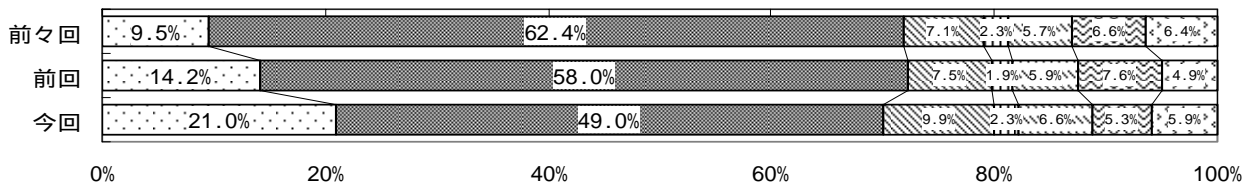


3年生では、約6割の生徒がすでに将来の職業を決めており、約4割は高校入学後に決めている。フリーター・ニートなどが社会問題になっている今日、3年間を見通した進路指導（キャリア教育）が求められる。

10 「将来像（どんな人になりたいか）」

<高校生全体>

- 社会や人の役に立つ人
- 自分の好きなことを生かしている人
- 経済的に豊かな人
- 地位や名誉のある人
- みんなと同じくらいの生活ができる人
- 特に考えていない
- その他

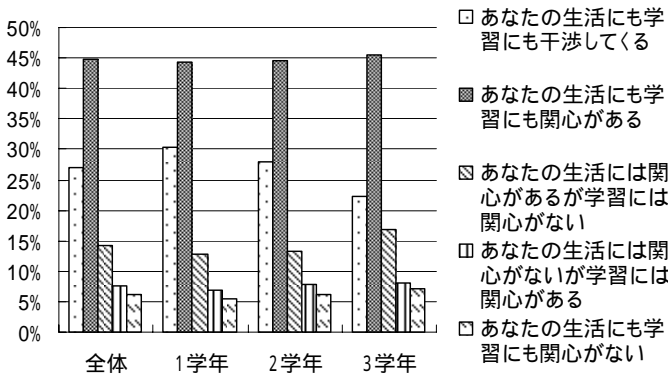
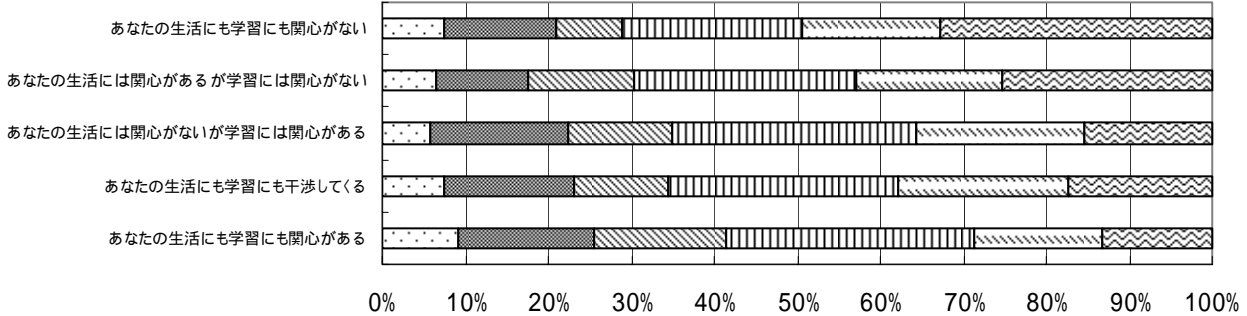


回を重ねるごとに、「社会や人の役に立つ人」と「経済的に豊かな人」のポイントが増加する一方、「自分の好きなことを生かしている人」が減少してきている。キャリア教育やボランティア活動・福祉の体験等によって、社会や他人のことに目が向いてきている傾向がうかがえる。

11 「子どもが感じる大人の態度」〔新〕

家庭学習と親の態度の相関関係

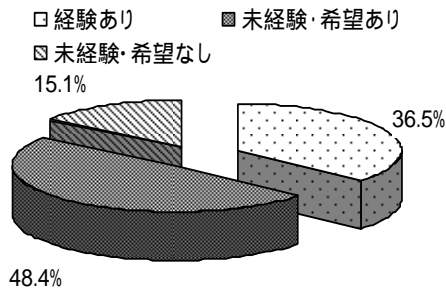
- どの教科もすすんでやる
- ▣ 進路にかかわる教科はすすんでやる
- あまりすすんで勉強しない
- 自分の得意な教科はすすんでやる
- 宿題があればやる
- ▣ ほとんどしない



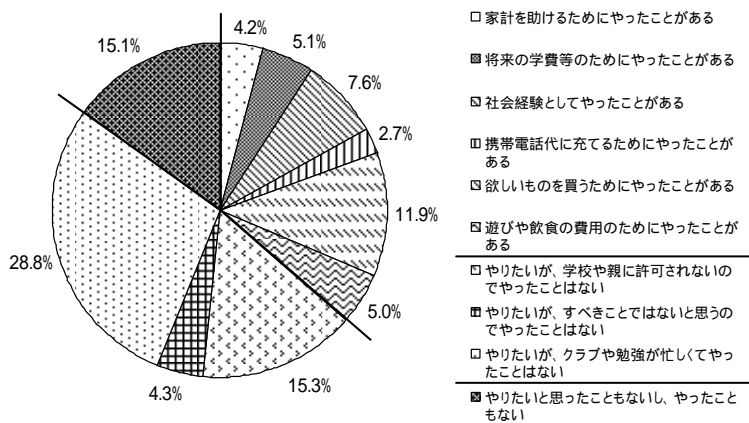
学年の進行と共に、「干渉」のレベルが減少し、「生活」と「学習」の両方に関心を持ち続けている保護者は微増している。「学習」に関心を示さない家庭では「ほとんど学習しない」割合が高い。常に生活・学習の両面で関心を持たれていると子どもが感じることで、子どもの学習意欲を育む傾向がある。家庭で再度、親子関係について振り返ってみることも必要である。

12 「アルバイト体験」〔新〕

アルバイト体験の有無



アルバイトの経験の有無とその理由

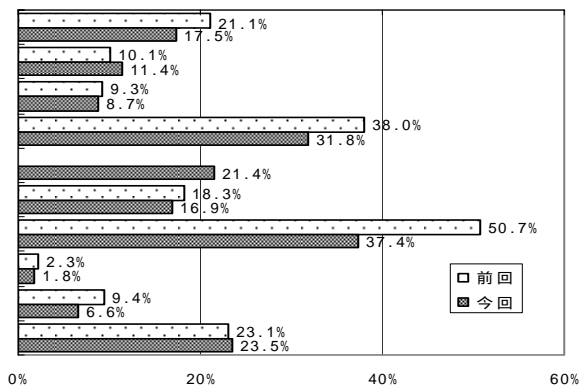


高校生全体の約4割が実際にアルバイトを経験している。生徒個人の生活を豊かにするためにアルバイトを考える割合が多い。

13 「保護者が現在の学校教育に期待すること」

<高校保護者全体 学校教育に期待すること>

- のびのびとした学校生活をさせてほしい
- 基本的な生活習慣をしっかり身につけさせてほしい
- 他人に迷惑をかけないように指導してほしい
- 基礎となる学力をつけてほしい
- 発展的な学力をつけてほしい
- 人間らしい生き方を教えてほしい
- 個性やよい点をもっと伸ばしてほしい
- もっと体を鍛えてほしい
- 子どもの気持ちをわかってほしい
- やる気を育ててほしい

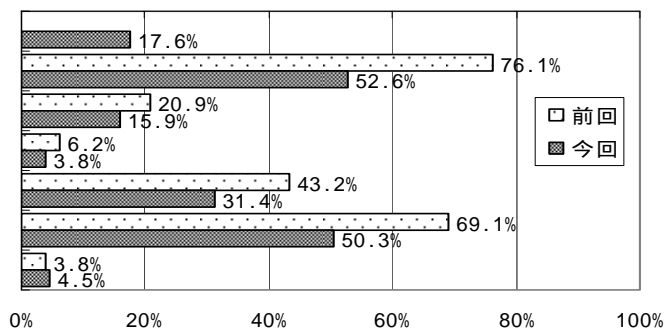


保護者の回答からみると、前回に比べ減少はしているものの、子どもの「個性やよい点を伸ばしてほしい」、「基礎となる学力をつけてほしい」の順は変わらない。また、「やる気を育ててほしい」と「発展的な学力をつけてほしい」という意見も多いということも考えておく必要がある。

14 「親子の規範意識」

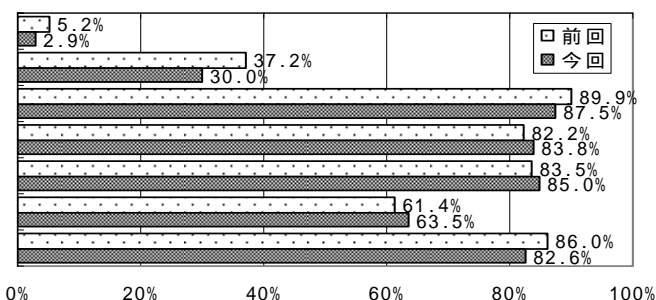
<高校生全体 してもよいと思うこと>

- 携帯電話を授業中に使用すること
- 学校であめやガムを食べること
- 授業をさぼること
- 道路にゴミをすてること
- 夜、遊び歩くこと
- 髪を染めたりピアスをしたりすること
- 人の物を勝手に使うこと



<高校保護者全体 注意してやめさせること>

- 携帯電話を学校に持って行くこと
- 学校であめやガムを食べること
- 授業をさぼること
- 道路にゴミを捨てること
- 夜、遊び歩くこと
- 髪を染めたり、ピアスをしたりすること
- 人の物を勝手に使うこと



高校生の17.6%は「授業中の携帯電話の使用」を、15.9%は「授業をさぼること」をしてもよいと思っている。一方、「あめ・ガム」の項目では、前回に比べ23.5ポイントの減と向上している。また、保護者では、「携帯電話」「染髪・ピアス」「あめ・ガム」の項目で注意してやめさせる割合が少ない。

「染髪・ピアスをする事」について問題がないとする高校生は50.3%、積極的に注意しない保護者は36.5%であった。この現状の中で学校における生徒指導は、学校の方針を十分説明し、理解を求めながら行っていくことが必要である。

現在、高校においては、携帯電話を学校に持ってくる生徒がほとんどなので、授業中、学校を含めた公共の場など場をわきまえた使用方法・マナーなどを指導する必要がある。

平成18年度 第5回 自律学校

児童生徒の生活・学習実態調査の結果から

平成19年3月
長野県教育委員会

多様化した児童生徒及び保護者の生活・学習意識を研究調査し、学校と家庭が連携して児童生徒の自立する力を一層伸ばすための指導に資する目的で本調査を実施しました。本調査は平成2年度より数年おきに実施し、今回は5回目となります。

今回は、前回（平成14年度）の調査との比較も可能な限り行うとともに、【交流・地域サポートの利用、個別の教育支援計画の作成と支援会議の実施状況】などの調査項目を増やしました。

以下に、その概要をお知らせしますので、今後の指導に生かしてください。

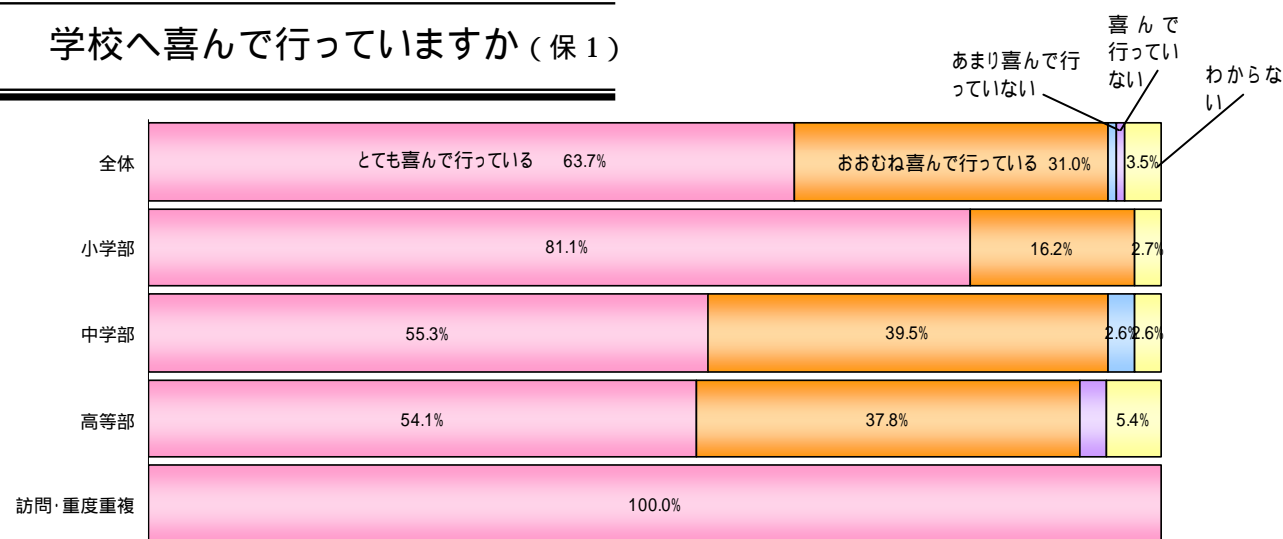
小・中・高の結果は、県教育委員会のホームページをご覧ください。

（HP アドレス <http://www.nagano-c.ed.jp/kenkyoi/>）

調査対象	県下自律学校19校の各小学部・中学部・高等部の中から、各2名の児童生徒（113人）及びその保護者（113人）、担任教師（114人）。総数340人
調査実施期間	平成18年7月10日～7月26日
調査内容	小・中・高等部の児童生徒の生活・学習実態、教師及び保護者の意識。 調査項目数、全6分野26項目、児童生徒14項目、保護者24項目、 教師10項目
調査方法	アンケート方式

調査結果の概要

1 学校へ喜んで行っていますか（保1）



「とても喜んで行っている」と「おおむね喜んで行っている」を合わせ、94.7%の保護者が「喜んで学校に行っている」と感じている。一方で、「わからない」「喜んで行っていない」と感じている保護者も5.3%いる。こうした保護者の気持ちに心を寄せ、その要因を探りながら、全児童生徒が喜んで通える教育の場の実現に向けた努力を続けたい。

2 児童生徒の毎日の生活の充実感 (児生1, 4)

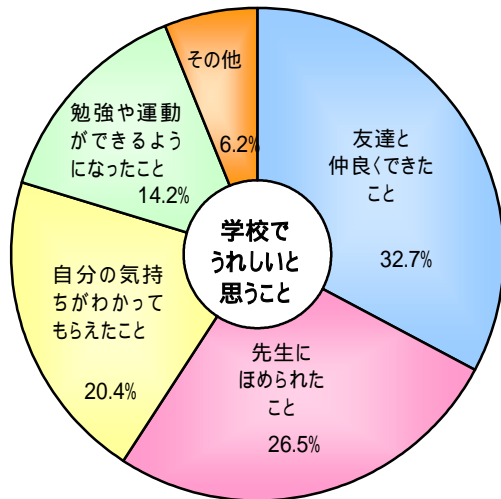
(%) 【生活全体で】

毎日の生活で満足できること(上位7項目)		
1位	テレビ・パソコンなどのゲーム	24.8
2位	友達との遊びやスポーツ	21.2
3位	友達とのおしゃべり	17.7
3位	先生とのおしゃべり	17.7
5位	好きな教科の学習	15.9
5位	趣味	15.9
7位	家族とのふれあい	15.0

児童生徒が最も打ち込めて、満足できる時間は、前回調査で3位であった「テレビ・パソコンのゲーム」が1位となり、続いて「友達との遊びやスポーツ」「友達・先生とのおしゃべり」の順である。

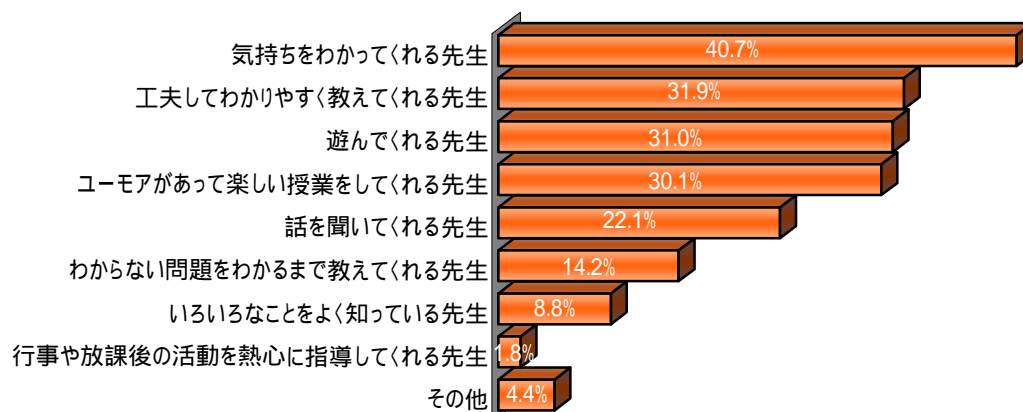
【学校で】

「友だちと仲良くできたこと」「先生にほめられたこと」「自分の気持ちが分かってもらえたこと」を合わせ、79.6%の児童生徒が人との良好な関係の中に喜びを見出している。前回との比較では、「勉強や運動ができるようになったこと」が減り、「先生にほめられたこと」が増えている。



家庭と連携し、進んで取り組める活動を増やしながらか、人とかかわりを広げ、円滑な人間関係づくりにつながるような支援を大切にしたい。

3 どんな先生に教えてもらいたいか (児生2)



前回調査で1位であった「遊んでくれる先生」が3位となり、今回は「気持ちをわかってくれる先生」が1位となっている。前回より23.5ポイント増と大きな意識の変化が見られる。

児童生徒が教師にいろいろな役割を期待している様子もうかがえる。

4 保護者と教師の児童生徒に付けたい力 (保 17, 教 3)

上位 5 項目

(%)

	保護者		教師	
1 位	基本的な生活習慣の確立	31.9	コミュニケーション能力	34.2
2 位	集団への適応(対人関係・協調性)	26.5	集団への適応(対人関係・協調性)	31.6
3 位	障害からくる困難を乗り越える力	24.8	基本的な生活習慣の確立	25.4
4 位	教科的な知識の習得	14.2	情緒の安定	16.7

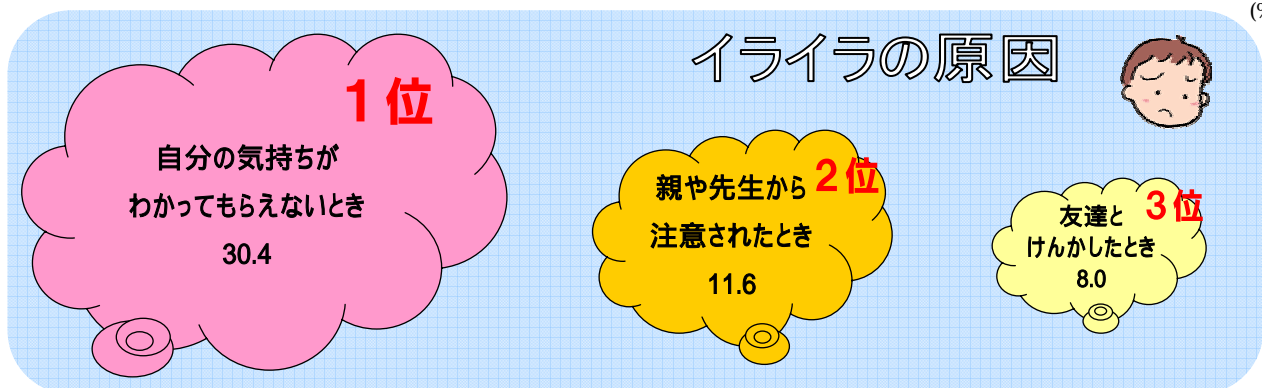
児童生徒に付けたい力として保護者が 1 位にあげている「基本的な生活習慣の確立」は、教師においては第 3 位であり、教師の 1 位は「コミュニケーション能力」である。保護者は個に目を向ける傾向があり、教師は集団とのかかわりに目を向ける傾向がうかがえる。

両者の意識の違いを尊重しながら、個別の指導計画の作成過程や懇談会等で、保護者との相談・話し合いを重ね、共通理解を図っていきたい。

5 イライラの原因と、その解決方法 (児生 8, 9)

上位 3 項目

(%)



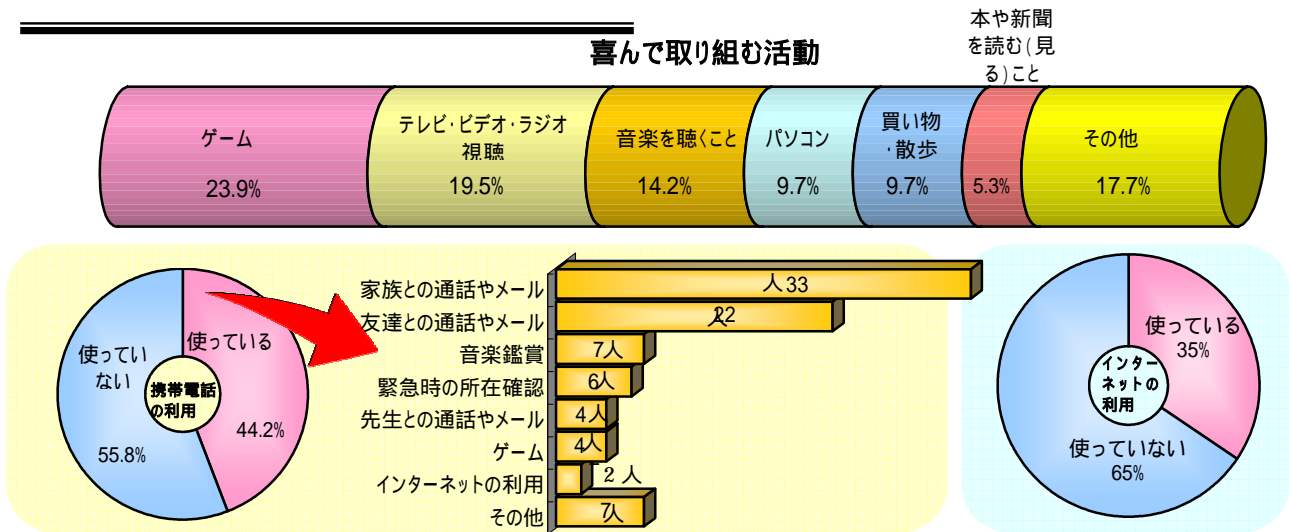
	イライラの解決方法		
	小学部	中学部	高等部
1 位	大声を出したり物や人にあたったりする 42.1	大声を出したり物や人にあたったりする 29.7	音楽を聴く 28.9
2 位	ゲームをしたり、マンガを読んだりする 18.4	ひとりでがまんする 24.3	友達とおしゃべりする 23.7
3 位	友達とおしゃべりする 13.2	先生に話す 18.9	先生に話す 23.7

イライラの原因の第 1 位は、「自分の気持ちがわかってもらえないとき」である。

その解決方法は、小・中学部において「大声を出したり物や人にあたったりする」が第 1 位であり、小学部では「ゲームをしたりマンガを読んだりする」、中学部では「ひとりでがまんする」がそれに続く。高等部の第 1 位は「音楽を聴く」となっている。

児童生徒の心の動きは様々なところで、様々な形になって表れてくる。児童生徒の言動の変化やサインを見逃さず、気持ちの理解に心掛けたい。

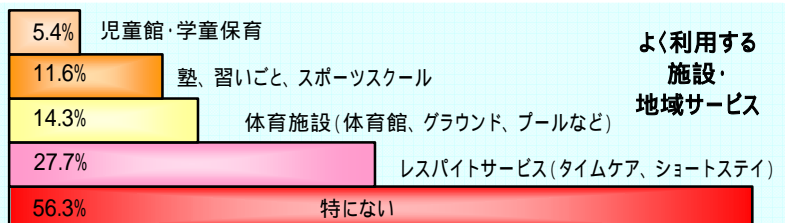
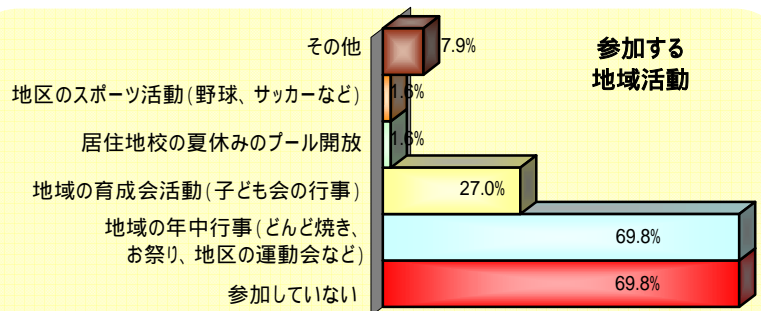
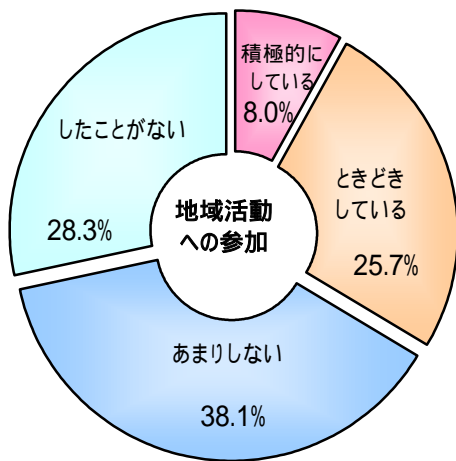
6 家庭での過ごし方 (保5, 9, 10)



喜んで取り組む活動は、「ゲーム」「テレビ・ビデオ・ラジオ視聴」が多く、休日になるとそれらに費やす時間が長くなる。前回調査と比較すると、携帯電話の利用率は、27%から44%に、パソコンの「インターネットの利用」は16人から39人に、急増している。

情報機器のより有効な利用のために、危険性についても十分な理解を促し、その具体的利用方法を家庭とも連携して指導していきたい。

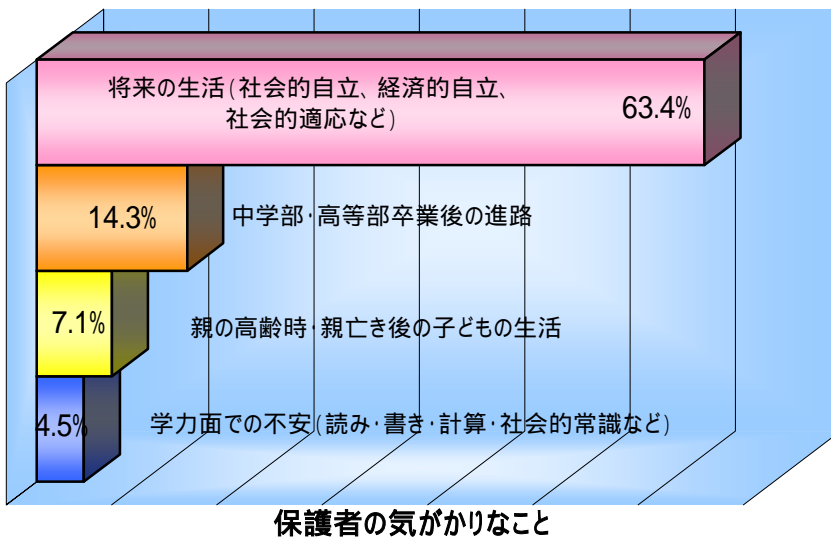
7 地域校交流・地域活動への参加と福祉制度の利用 (保11, 16, 18)



地域活動の参加は「あまりしない」「したことがない」が全体の66.4%を占めている。年齢が上がるにつれ、参加が少なくなる傾向がある。よく利用する施設・サービスは、「特にない」が半数以上であり、地域への参加がなかなか進まない状況がうかがえる。

子どもたちが、将来地域の中で活動していくようになることを踏まえ、学齢期のうちから地域の活動やサービスの利用をすすめ、地域参加の意識を高めることを大切にしたい。

8 保護者の不安 (保 19)



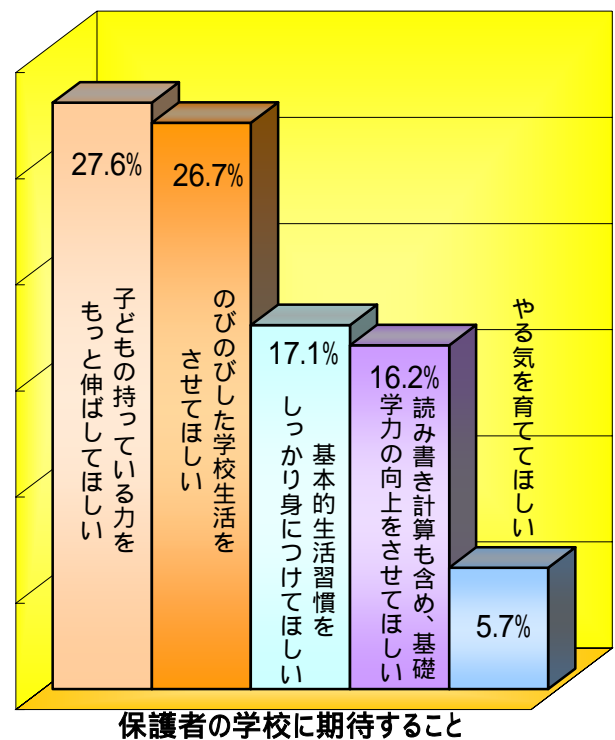
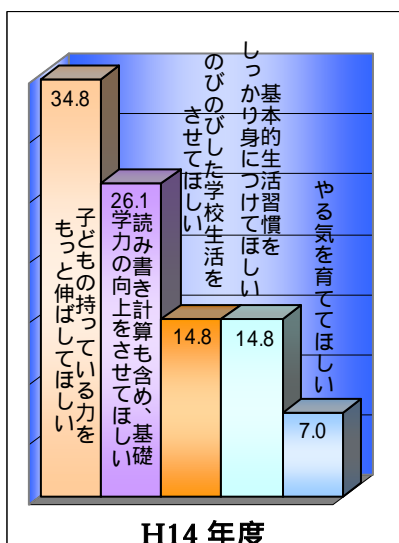
子どもについて保護者が最も気がかりにしていることは、「将来の生活」である。「中学部・高等部卒業後の進路」や「親の高齢時・親亡き後の子どもの生活」がこれに続き、その合計は84.8%にのぼる。

このような保護者の不安を踏まえ、必要に応じて将来の進路や生活にかかわる情報にも早期からふれ、相談を重ねていくことが重要である。

9 保護者の期待 (保 18)

「のびのびとした学校生活をさせてほしい」と考える保護者の割合が急増し、学校教育に対する保護者の意識が大きく変化している様子が見える。

児童生徒の持っている力や可能性の芽を見極めるとともに、どのような活動の中でその力を伸ばしていくかといった工夫が求められている。



調査結果からの提言

更に豊かな児童生徒の学校生活や家庭生活の実現に向けて、次の点に留意したい。

確かな人間関係づくりを

関係づくりの基本は「相手の気持ちを察する」である。児童生徒、保護者の思いに共感しながらコミュニケーションを重ねることで、確かな関係が形成される。

できた喜び、伸びている実感を共に味わうことができる場面設定や支援を大切にしたい。

「個別の指導計画」や「個別の教育支援計画」の有効活用を

この活用には2つの効果がある。児童生徒の成長を通じた指導の見返しであり、作成・見直し過程の関係者間のコミュニケーションによる信頼関係・協力関係の構築である。

この効果は児童生徒の教育成果に直結する。その認識を新たにし、工夫して取り組みたい。

地域とのかかわりを

将来を含め、児童生徒が居住地でより質の高い生活をする事が求められている。制度の改正や、受け皿となる施設・サービスの整備が進んでいる。これらの情報を保護者と共有し、よりよい利用を進めながら、地域との結びつきを強めていきたい。